

— アメリカ人の自己探求の壁 —
(James Baldwin の世界 1)

百 武 京 子

現在、我々日本人は生活を送っている最中で、「どうして生きていられるのか？ どうして今まで生きてこられたのか？」等と疑問に思ったことがあるのか。ほとんどの人が、考えてもみたことが無い、と言っても過言ではないだろう。とは言え、我々は生きてきたし、今も生きている。これは、自分の存在する社会が、自分に密着し、人間として存在することの困難を、敢えて考える必要が無いからである。我々の社会においては、周囲の人々が皆同じ人間であることは、暗黙の了解であるからだ。しかし全く違う歴史を持った異質の人々の集っている社会では、事情が違う。それは、我々の想像を絶する程のものである。ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin, 1929～) の描く『もう一つの国』 (*Another Country*, 1962) のニュー・ヨークには、人間を人間として認めるのに、口に出さなければ伝わらない、否、口に出しても伝わらないという、我々の社会とは、全く違う世界がある。

“It was so familiar and so public that because, at last, the most despairingly private of cities. One was continually being jostled, yet longed, at the same time, for the sense of others, for a human touch; and if one was never—it was the general complaint—left alone in New York, one had, still, to fight very hard in order not to perish of loneliness.”¹⁾

ボールドウィンがこの様に描写する社会の人々が織り成す様々な問題、苦悩の中には、人を死にまでも追いやってしまう程の凄まじいものがある。その中で最も根深く人々の心にくいこんでいるものが、孤独である。あまりにたくさんの人間が存在する為に、いつも他人と接触して

いなければならない。その為に人は、いやおう無しに常に自分を意識させられる。そして、孤独という怪物に呑み込まれそうになっている自分に気付く。各々、その孤独と戦いながら生きていく。というより戦っている時が活着している時、と言った方がいだろう。戦い続け、疲れ果て、そして、戦いのを止める時、彼等の辿る道は一つ、死である。なぜなら、彼等が戦ってきた相手、孤独とは、即ち、彼等自身だからだ。

恐しい孤独の中で朽ち果てない為に、人は身を寄せて生活する。そして、感動的な、又は情緒的な、又は伝統的な基礎のいずれかにもとづき得る共同社会関係を形成する。そして、今日のような自由が叫ばれる大都會では、情緒的基礎を持った共同社会関係が最も多いのではないだろうか。少なくとも、ボードウィンの描く若い世代においては、そう言えると思う。彼の問題にする情緒的基礎とは、愛であろう。愛、この言葉にどれだけ深い意味がこめられているだろう。どれだけの人々が、この言葉に苦しんだだろう。社会の基礎と成り得る愛、一方、人々を苦しめる力を十分に持っている愛。時には、愛のために、命を落とす人さえ居る。我々が、ほとんど絶対的である、と見なすことさえあるこの愛という基礎が、いかに掴みどころのない頼りない醜いものであるかを、ボードウィンは示してくれている。では、その愛の質、要素とでもいうべきものに目を移してみたい。

愛、と一言でいってしまえば簡単なようだが、では、一体愛とはどんなものであるかということになると、その説明はむずかしい。親子の愛、兄弟の愛等いろいろあるが、例えば男女の愛は、どうであろう。二人の男女の間を行き来するある種の感情であることに間違いは無いのだが、感情という抽象的なものだけに、これが本物だ、にせものだとは、誰にも言えない。そればかりか、これが愛だ、と定義するのさえ不可能なことかもしれない。ここでは、その漠然とした愛という感情を、二つに大別してみる。一つは、我々が、理屈抜きで愛だと認める愛と、もう一つは、転移としての愛である。これは、何か精神的動機が働いて、自分が相手を愛しているんだ、と勝手に思いこんだり、相手が自分を愛し、必要としているんだ、等という錯覚に陥ることである。しかし、表

面的には、愛し合っているかの様に写ったりすることがある。この様な二つの愛には、どの様な違いがあるのだろうか。内容は、確かに全く異質であるが、結果においては、多少、合致する点があるのではないか。少なくとも、相手を傷つけるかもしれない、という点においては。

ルーファスの妹アイダは、彼の死因を、転移としての愛に帰依していると述べている。白人が、愛の名を借りて、ルーファスが彼等に与えることのできるもの以上のものを要求したから、彼が死んだのだというのである。又、若い頃、打算も何も無くただ純粋に愛し合って結婚した夫リチャードに、妻キャスは、

“You and I have hurt each other—many times. Sometimes we didn’t mean to and sometimes we did. And wasn’t it because—just because—we loved—love—each other?”²⁾

と問いただしている。作者は、愛の中に、憎しみにも似た、激しく相手を傷つける要素を示している。では、この憎しみという感情は前に述べた二つの愛の形体のどちらにも、存在するのであろうか？

ルーファスの死後、ヴィヴァルドやキャスは、彼を愛していた、とてもいい奴だったと言う。黒人であるルーファスが、白人であるレオナに対してした行為など無かったことの様な顔をする。しかし、リチャードは違った。彼は、ヴィヴァルドやキャスが、ルーファスが黒人であった為に、愛してるのだ、と騒ぐのだと言う。そして彼は、ルーファスがレオナに対して為した行為のためにルーファスを憎んだ。彼は、人間として、ルーファスが許せなかったのである。彼は、ルーファスを対等な人間の立場から、憎んだのである。だが、ヴィヴァルドやキャスは、彼が黒人であるが故に、対等な人間として接しなかった。彼等はただ、ルーファスを見下していただけであった。彼等の愛とは、それを隠すものだった。彼等の中にあつたものは、黒人に対する、測り知れない憎悪、嫌悪、恐れであった。つまり、愛とは、相手を対等と見なさなければ生まれない現象で、それに属する憎しみも又、然りである。そして、本気で

愛そうとすれば、憎しみが顔をのぞかせる。ほんの一瞬の出来事でも、人はその影に、すっかりおびえてしまう。次第に、その影は、二人を支配し始め、ついには二人を離れさせる原因にも成り得る。この様に、一見、二人を結びつけるかのごとく見える愛にも、実は二人を離れさせてしまう要素があるのである。

しかし、愛も憎しみも生ずることのない対等ではない立場の黒人の心理は、どうであろうか。レオナと出会ったルーファス。ヴィヴァルドに出会ったアイダ。ルーファスは、アイダが “But you’ll pick up any white trash just because she’s white.” と言うだろうと思っていた。しかし、そのアイダでさえ、歌手の道を切り開くために、自分の黒い肌を利用した。ルーファスは、レオナと居る間中、彼の黒い肌を意識しないわけにはいかなかった。アイダにしても、黒い肌を目をつけられた限り、それを利用せざるを得ないのである。白人が、色のことを楯にとって彼等に接する限り、白人と黒人の間には、愛も憎しみも生まれやしない。ただ、嫌悪が生じるだけである。そして、アイダの言う様に、ルーファスが死んだ時、周囲の白人たちが嘆き悲しんだのは、彼等のおもちやがなくなったから、というだけに過ぎないのであろう。白人にしてみれば、ルーファスの死はおもちやを失うことであつたが、ルーファス自身、死、とは何であつたのだろうか。対等な立場に立つことのできなかつた彼は、どの様に苦しんで死に至つたのだろうか。愛という隠れ蓑の下にある白人の嫌悪感が、どの様にルーファスを死に追いつめたのだろうか。先程述べた、白人の転移の愛以外に留らず、もっと根深いところに、その原因はあるのである。

「社会的行為のおおのの秩序は、前述の様に、ともかくも生存のチャンスをめぐるさまざまな人間類型の競争における純粹の、事実上の淘汰を存続させるものである。」³⁾ マックス・ウェーバーは、共同社会関係における闘争についてこう述べている。愛や憎しみの入り混じる社会には、一見、人間らしい暖かさを感じる。しかし、愛し合う、憎み合うという行為の一つ一つが、人間の淘汰につながっている、と考えるとこの社会が、今更ながら恐いものであると感じざるを得ない。アイダは、

ルーファスがどうやって人々を自分から遠のけたらいいのかわからなかったのだという。つまり、彼が自分にふりかかる敵の攻撃をよけきれなかったことと同じであろう。彼は、強いものが弱いものに勝つという自然界の淘汰の中に負けてしまったのである。

又、ロバート・A・ボーンは、“The Negro Novel in America” (1971)の中で、白人は自分の中に悪や罪の影を見つけると自分がそれによって破壊するのを恐れてそれを絵で黒人のせいにしてしまう、という意味の事を述べている。つまり、白人達は黒人を自分達の利益の為とか身を守る為の道具位にしか考えていないのである。そして、ルーファスが、白人の道具にされたのも、それからのがれることができなかったのも、彼が黒いということだけのためであった。黒いということが生み出す、彼等にはどうすることもできない問題。その問題が、ルーファスを死においやったといってもいいだろう。

では、ルーファスの生まれて死ぬまでの人生は一体何であったのだろうか。彼とて、何も抵抗せずに死んでいったわけではない。何らかの形で、彼自身精一杯の抵抗の末に、死を選んだのである。

人間の生活は、たとえそれが楽しいものであれ、悲しいものであれ、激しいものであれ所詮、無にすぎないのではないだろうか。毎日、あたかも生きているかのように見える我々は、実は個々ばらばらの命が、単に偶然に、重なり合っているにすぎない、その無意味の中で、皆苦悩にあがき、何かを得ようと抵抗し、疲れ果てる。我々の人生は、手の中に握りしめられたパウダースノーの様になる。一見、かたまっただけに見えるパウダースノーは、手を開けばサラサラとこぼれ落ちる。そして、キラキラと光るパウダースノーも、肌を刺す様な冷たさがある。全てこぼれ落ち何もなくなった手の中には、その冷たさだけが長い間残るのである。しかし、そこで冷たさ以外の何ものかを残すために、我々は疲れ果てながらも努力しているのである。

人々はよく、死と対面することがあると、自分の人生が頭の中でサッと流れていくのを見るという。人生の要素を見るのである。ルーファスが、死ぬ間際に考えたことは、彼の黒さであった。自分も、ヴィヴァル

ドも、レオナも、皆同じ天の子なのに、自分は黒い、ということだった。彼にとっては、黒いということは、彼の人生を支配した要素なのである。

先に、ルーファスは黒いということが生み出す問題によって死に追いやられた、と述べた。ということは、彼や彼を取りまく社会が、彼の黒さを忘れさえすれば、彼は死なずにすんだということになる。だが、彼の黒さは、彼の過去の人生そのものであった。人間にとって過去はかけがえのないものである。現在の自分は過去の継続的産物であるからだ。過去を否定することは、現在の自分を全て否定してしまうことになる。自分を否定すること、つまり、死である。ルーファスにとっては、忘れることのできない黒を否定するには、これしかなかったのである。自分の国を持ち、同じ人種の社会の中で生活してられる我々にとっては、死という手段の他にもっと良い方法が、と考えるかもしれない。だが、ルーファスが生きた白人が支配する社会で、果たしてそう言えるだろうか。ヴィヴァルドは、“Perhaps if you can accept the pain that almost kills you, you can use it, you can become better.”⁴⁾ と言う。ここで、若しルーファスが肌の黒さを克服したとして、事態はどう変わるだろうか。人は、自分をつくり変えることができると信じて、何をもたらしてくれるかもわからない明日に、夢と希望をかけるのである。そうでなければ、この残酷な社会で、己の生を守ることができないのである。だが、黒さを克服するルーファスの前に立ちはだかる白人社会という怪物は、執拗な攻撃で、彼が黒いという事実をルーファスの頭に再びたたきこむであろう。例えば、彼がレオナと愛し合い、生活を始めると、歩いている二人を見る社会の目が、二人のアパートを見る社会の目が、ルーファスが、白人と対等に生きていこうとする努力を無にしてしまう。白人に対する、努力と抵抗をくり返すたびに、彼は裏ぎられるのである。そして、彼は又、振り出しに戻らざるを得なくなるのである。ヴィヴァルドは、愛していることを伝えることができさえすれば、彼を死なせずに済んだらろうという。が、たとえ伝わったとしてもやはり、ルーファスは死んだに違いない。彼を死に追いやったのは、愛とか恋と

かいう感情ではなく、もっと深い苦悩だったからである。と、こう一概に断言してしまうのは的はずれかもしれない。というのは、ヴィヴァルドの言う愛が、純粹に愛だったなら、あるいはルーファスは助かったかもしれないからだ。前に、ヴィヴァルドやキャスはルーファスのことを憎んでいて、それを隠すために、愛しているというのだと述べた。では、どうして、憎んでいることを隠して、愛しているという必要があったのだろうか。

ルーファスの回りの者たちは、確かに彼を求めていた。だが、その求め方は、一体どんなだったのだろうか。ヴィヴァルドが求めていたものは、ルーファス自身だった。しかし、彼が実際に手に入れたものは何だったであろう。周囲の人々は、ルーファスその人を求めていた。しかし、人間に、肉体と精神を区別する手立てがあるのだろうか。精神を求めることは、肉体を求めることと同じである。決して、精神だけを求めることはできない。その時に、彼等やルーファスが、自分とは全く違った人間の存在を認識すべきであった。そして、彼等と自分との関わり合いを認め、生きていくということは、その事態を把握することから始まるということに気付けばよいのである。これは、白人たちにとっては、かなり容易なことであろう、少なくともルーファスよりは。そして彼等は、ルーファス、その人だけを利用したかったのである。故に彼等はルーファスの黒さなど気にしてない振りをして、憎悪を隠したのである。愛は、彼を利用せんがための、憎悪の隠れ蓑だったのである。だが、白人は、自分達のこのエゴイズムが、どれだけ黒人を深いところまで追いつめ、苦悩を与えているかということには、気付かなかったのである。

エリックは、自分は一体、ルーファスを愛していたのだろうかと自問する。そして、彼は、ルーファスの黒い肌に黒人の歴史を見てしまう。汗が流れるチョコレート色の黒人の胸や肩、歌いながら木を切り倒す様子を、はっきりと見るのである。そして、彼は、そのためにルーファスを憎んでいた。ルーファスは、エリックの目に写る彼の黒人に対する嫌悪の色を容易に見てとることができた。だがエリックが自分を愛しているなんて信じることなどできなかった。ヴィヴァルドにしても同じであ

る。色等問題ではなく、白も黒も平等で、一緒にお酒を飲み、一緒に眠り、お金の貸借もやった彼等のはずだが、ヴィヴァルドもやはり、ルーファスが黒人であるが故に恐れ、嫌悪したのである。

レオナを愛したルーファス。愛し合う二人が身を寄せて暮らす生活に水をさす白人社会。民主主義の自由な国であるはずのアメリカ。この言葉に、一体どれだけの黒人達が裏切られたことだろう。裏切り。まさに裏切りである。子供の前にケーキを置き、食べようとしても何も言わず、食べてしまってから、どうして食べたのだと叱責する大人みたいなものである。職業も然り、人間関係も然り、住む所も然りである。自由の国だ、自由だと言っておきながら、黒人が街を歩けば、ツバが飛び、警官が身構える。白人と話しをしようものなら殺人者を見る様な目で見つめる。これが裏ぎりではなくてなんであろう。古い時代の黒人ならば、自分の行動に圧力がかかっているのを十分承知し、最初から、自由な振舞などすることはない。だが、自由を目の前にぶらさげておいて、手を伸ばしてさわると批難される。自由の国の裏切りである。

友に裏切られ、社会に裏切られ、国に裏切られる。自由という憧れを目の前にして、現代の黒人は、どうしなければならぬのだろうか。白人は、自由を目の前にした黒人達全てを死に追いやる所にまできているのだろうか。死という手段の他に、彼等の怒りを爆発させる方法も、もはや白人たちに封じられているのであろうか。迫害されていると感じ、白人を信じるのでできなくなった黒人たちの孤独。愛していることを伝えることができないとって孤独に悩む白人。孤独の入り混る街で、彼等はどうやって生きていけばいいのだろうか。ポールドウインは、愛という“another country”に期待をかけているのであろう。

それにはまず、人々が、自分と人とが関わり合いながら存在していることと、その中に生きる自分を認めることから始めなければならないのではないだろうか。その事実を避けていたのではいつまでたっても白人と黒人の関係は平行線の状態である。そして、自分自身に直面して打ち勝つ強さを持たなければならないのである。そうしなければ、彼等は生きていくことがむずかしいであろう。

そして、彼等が「何故生きてきたのだろうか？」と自問して「人間だからだ」と、確認することのできる世界を、ボールドウィンは期待しているのであろう。

Notes

- 1) James Baldwin, *Another Country* (DELL PUBLISHING CO., INC. 1962) p. 195.
- 2) Baldwin, p. 94.,
- 3) Max Weber, 『社会学の基礎概念』(角川書店 1935, 阿閉吉男, 内藤莞爾 訳) p. 72.
- 4) Baldwin, p. 329.